

教師を育てた 言葉たち

No. 015

秋田県立秋田高校 土門高士先生 どもん・たかし

◎教職歴22年。同校に赴任し10年目。2年間の進路指導主事を経て、現在1学年主任。国語科担当。高教研国語東北大会(2012年)授業公開・全国大会(2018年)研究発表。秋田県高体連サッカー専門部総務委員長。東北100人会(東北地区進学学習会)幹事。



私 はこれまで小規模校に何度か赴任し、学年全クラスの国語の授業を受け持つことも度々ありました。そのため、恥ずかしながら、自分の力で生徒全員の希望進路を実現させるという意識を強く持っていた時期がありました。生徒が自己の課題に向き合わないと、希望進路は実現しません。そこで、目標や課題を明確にし、生徒を希望進路に挑戦させようと、「**目標 - 現状 = 課題**だ」と言い続けました。

自分が頑張れば合格実績につながると、指導に自信を持ち始めた頃に赴任したのが、県トップの進学校である本校でした。当然ながら、それまでとは異なり、自分の力だけで生徒全員を指導するには、人数的にも教科的にも限界がありました。志望校に進学できずに涙を流す生徒を目の前にして、自分はどうすべきだったのかを問い直した時、課題を抱え込みすぎたこと、もっと周りの先生方と話をしなければならなかったことに気づきました。私自身が、現状認識が甘く、課題に向き合えていなかったのです。

苦 い経験を経たからこそ、自戒を込めつつ、担任・進路指導主事・学年主任という立場に応じて、生徒には「**目標 - 現状 = 課題**」を強く意識して話すようになりました。加えて、それが行事や部活動などにあてはまることも、事あるごとに伝えています。

最近では、目標が、達成できたらよい「最高目標」なのか、絶対達成したい「最低目標」なのかも意識させています。今年の文化祭では、私が学年主任を務める1学年で、多くのクラスの出し物が全校順位で上位に入賞しました。ただ、その大半が計画的に

準備を進められず、最後に何とか完成させたものでした。そこで私は、学年集会で、「目標は全校1位ではなかったのか。この結果に満足してよいのか」と生徒に尋ねました。そして、「目標への考え方は、大学入試でも同じ。君たちの力なら、入試直前からでも本気で勉強すれば、どこかの大学に入れるかもしれない。でも、それは、本当に目指していた目標なのか。譲れない目標を考え、現状と課題を把握し、日々を過ごしてほしい」と話しました。

生 徒は未来の宝であり、だからこそ、泣く生徒をつくらないというのは、常に胸にある目標です。1人でその目標は達成できません。先生方、特に学年団と、個々の進路行事や学校行事が目指す目標について話しています。それが明確にならないと、生徒が行事を通してどう成長したのか、生徒も教師も振り返りができませんし、学校の取り組みも本来の理念を失い、簡単に形骸化してしまいます。伝統の精神すら、ただのかけ声に墮してしまう可能性があります。目標を共有し、課題をチームで明確に持って生徒を育てる雰囲気、学年団、学校全体に醸成される。それが、新たな目標でもあります。

ある講演会で、「**目標 - 現状 = 課題**」の重要性を講師が強調していました。また、県内外の先生方と話す機会に、言葉は違えど似た考えを持つ先生方にたくさん教えていただき、勇気づけられました。伝えたい内容や込める思いが言葉の中で深化していくように、これからも生徒や同僚と一緒に成長していきたいと思います。

秋田県立秋田高校 全日制/普通科・理数科/共学/1学年約270人/2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、秋田大、東京大、京都大などに238人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに延べ251人が合格。